

関東山地における高距縁辺集落

山 口 源 吾

一、研究課題と対象地域

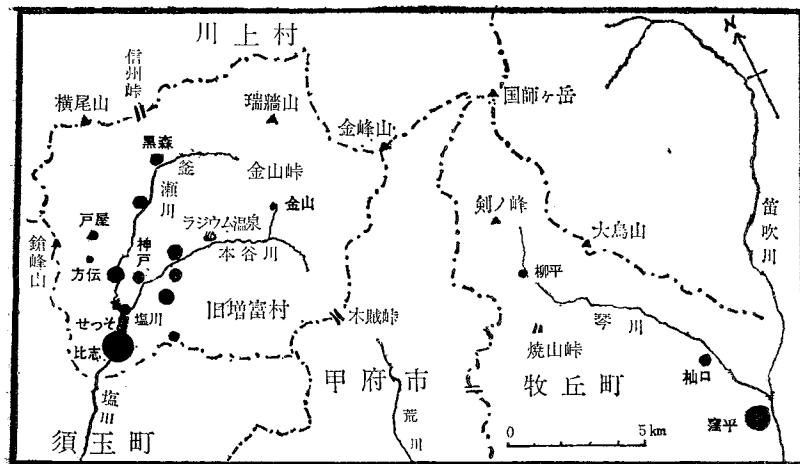
関東山地の南西部には、わが国の代表的な高距集落が存在する。いまこれら集落のうち特に高距縁辺集落について、その生活態様を調査研究し、わが国の山岳地域開発の拠点としての高距定住集落の立地限界を知ろうと思う。

定住集落の立地は生産基盤としての開拓適地や林野利用地の選定によってのみ決定されるものではなく、消費生活に頗れた生活水準がある程度保障されるときはじめて可能となるものである。

こうした問題意識をもつて、本邦で最も標高の高い農村といわれている山梨県の旧増富村金山、黒森等の諸縁辺集落や、まだ定着不十分な牧丘町柳平開拓地の実態を明らかにして、目的の解明に近づこうとするものである(第1図)。

二、増富山村の特性

1 隔絶的位置と到達度



第1図 対象地域概念図

増富は山梨県北巨摩郡、秩父多摩国立公園の西辺、峠北山地の一小山村である。昭和三十四年須玉川に沿う平地村須玉町に編入されて、その一区となつたが、中央日本における最高標高の高冷山村である。

旧増富村は韮崎市から北へ、富士川の複支流塩川を廻ること二十九
余糸、塩川の支流本谷川と釜瀬川の谷底、或は前輪廻の旧河床、或
は泥流におおわれた山脚などに分布する比志・櫻山・日向・日影・
東小尾・黒森・和田・御門・神戸・塩川・戸屋・方伝・ラジウム温
泉・金山等の小散村から構成されている。

海拔高度は集落の下限比志で八四〇米、上限金山で一四一〇米に達する。（五万分一地形図金峯山・八ヶ岳参照）

この村に入る唯一の幹道は塩川に沿うものであるが、比志から上流の地域は「せつそ」とよばれる峡谷通仙峡（写真1）に妨げられて車が通らず、三軒屋から通称忠魂碑の峠を越えて塩川集落に出た。本谷川に沿う集落には一たん尾根集落神戸の急坂比高二四〇メートルを登り、山稜と山腹沿の歩道を辿らなければならなかつた。

一方釜瀬川沿の集落へは神戸の尾根越に谷に下り小尾から谷底の

置にあつた。

一九三三年通仙峠沿いに県道塩川林道が開通し、はじめて荷馬車が通じて農林産物の移出が便利になつた。一九五二年にはこの林道にバスが乗り入れ、韋崎方面、甲府盆地との交渉を得た。

この地域の道路の幅員はいずれも四・六米以下と狭く、一九五六年当時村民の所有した主要交通機関が軽四輪トラック三台だけであったことは、いかにこの地域が隔絶的で交通に恵まれていなかつたかを物語る好資料である。バスは現在本谷川のラジウム温泉まで乗入れているが、釜瀬川の谷には乗り入れず、県道塩川黒森線の未整備はこの谷への文化導入の妨げとなつてゐる。一九六四年漸く県の観光道路が開通して、最奥の黒森、金山までトラック輸送が可能と



歩道を黒森へ、更に金山峠を越えて最奥の金山に達するのであつた。金山峠は本谷と釜瀬の両支谷を連絡するに過ぎず、南部の木賊峠（一七五五メートル）は荒富に川の上流に通じ昇仙峠を経て甲府に通するが難路で登山家以外に利用する者は殆んどなかつた。北部の信州峠（一四六四メートル）は比高が二六〇メートルで千曲川上流の長野県川上村に通ずるが、これも若干の木炭と薪の輸送の外は利用度が甚だ低かつた。こうしてここの地域は四隅が総て山地であるため、塩川筋を利用すればならないので、地形的に全く封鎖された隔絶的位置にあつた。

写真 1 通仙峠

なつた。

こうした事情で地方都市からの到達度はまことに貧弱で、韋崎からラジウム温泉まではバスで時間距離一時間四十分、金山は温泉から更に一時間余の徒步距離にある。一方釜瀬川の谷の最奥の黒森へは塩川で下車、神戸の尾根トンネルを経て徒步で二時間余を要する。

こうした交通位置にあるため、商圏は片側口で韋崎—甲府圏に属し、僅に木炭の一部が信州峠を越えて長野県佐久方面に出荷されているに過ぎない。

2 職業構成から見た特性と生産

増富は明治初年頃までは木曾山地の開田村に比較されるような牧馬中心の山村であった。

一九〇〇年頃は官有林（後出）の南斜面を借用して仔馬を育てたり、自給的な雑穀栽培をしていた。十余の小散村は山小屋の金山、ラジウムの温泉集落を除けばいずれも純山地農村で、山林への依存度が高い。いま一九六〇年の農業センサスによれば、職業別世帯数の約九〇%が農家である。農家戸数四四〇。

農耕は基盤の古生層や花崗岩が処々に露出し、これ等を覆う安山岩質の泥流、火山灰層が見られる谷壁や、一部河岸段丘の断片、現河谷の冲積地で行われている。全農耕地は田地一〇五ヘクタール、畠二〇七ヘクタール、平均一戸当たりでは田地〇・一二四ヘクタール、畠〇・四七ヘクタールで、これは平地村若神子を含む須玉町の田地〇・四一ヘクタール、畠〇・四〇ヘクタールに比して、その水田が狭小で畠作が卓越する上に全体として經營規模の零細であることが知られる。このため専業農家は僅に九・五%で兼農が大部分である。

農業生産の収入金額は約七〇〇万円で、生産物の主なものは米二八六トン、大麦八八トン、小麦七八トン、蘭二一

八・八トンであり、戦後は馬の飼育が減少して畜産物は僅少である。

土地利用から見れば放牧採草地六五〇ヘクタールは一戸当り一・四ヘクタールとなり山梨県平均の〇・三ヘクタールに比してはるかに広く、ここに乳牛導入による農家経済の振興に関して研究の余地が見出される。

次に林業生産を見ると、その総額は年八千万円に及び農業生産の十余倍であり、農家のうち実に九八%が林業を兼ねていて、林産の種類別順位は木材四五%、木炭三〇%、薪二五%で、林業こそ増富の主要産業である事が明らかである。ここに増富の生産経済の特質があるのであって、まさに中央日本における山村の代表的存在である。

3 森林の村

増富は森林の村である。旧村の総面積一〇〇・七平方キロのうち農耕地は僅に三・五%で、八六・三%は森林に覆われている。もしこれに採草地原野の六・七%を加えれば、森林原野は九三%となつて、この数字が更に増富が山村であることを意義づける。総面積八六九六ヘクタールという広大な森林は、その所有関係によつて私有林、公有林、県有林に分けられる。

以下これ等の森林と住民生活との関係について記述する。

・県有林

これはもと恩賜林^①といわれたもので一九一一年、山梨県の水害援助のために御領林を県に下賜されたものである。増富におけるその面積は七三一二ヘクタールで旧村の七二・六%を占める。旧村の全地域にまたがり、地形的には最も高距な部分を占める。林況は植物帶でいえばブナ帶に属し、標高が高くなるに従つて亜寒帯林となる。樹種はコメツガ・シラベ・トウヒ・カラマツの混交林で、広葉樹にはコナラ・クリ・カエデ・ハンノキ・ミズナラ等があ

る。釜瀬川流域の県有林はその八〇%が天然林で、樹令一五〇—二〇〇年に及ぶものがあるが、木谷川や木賊川流域の中腹以上は樹令三〇年のカラマツの人工林である。区民はこの払下げで製炭し、育林に従事して現金収入の途を見出している。

・公有林

公有林とは旧村有林と植林のため県から借用した林野の総称である。面積は九六ヘクタールで旧村面称の〇・九%に当る。主に旧村の北西部横尾山塊の南斜面に分布し、大部分がヒノキ、カラマツの人工林である。このほか西部山地の天然生広葉樹林地域もあるが狭小で蓄積量が少い。公有林は増富財産区が管理し、造林を行つて区の基本財産を造つてゐる。現在低生産性の広葉樹を伐採してそのあとに、スギ・カラマツを植えて林種転換がなされている。

・私有林

私有林は県有林よりも下部に分布し、海拔千米位にある。林況は大部分が天然生の広葉樹林で占められている。ナラ・クリ・ブナ・カンバ・カエデ・ミネバリ・ケヤキ・シホジ・ザツ等で、針葉樹にはモミ・ツガ・アカマツが見られる。面積は一二八八ヘクタール、旧村面積の一・二・八%を占める。黒森の農家では冬季に製板して移出する。

4 高距に伴つて低下する生活水準

農山村の生活水準は海拔高度の上昇に伴つて低下する。即ち標高と逆関係にある。いま合併母村の須玉地区と増富とを比較すれば次の如くである。

まず富の程度の指標として町民税と固定資産税について見れば、町民税納税者一人平均額須玉の五八七円に対して増富は一八〇円でその比は $\frac{1}{3}$ 以下。固定資産税のそれは須玉一二三五円に比し増富は六六二円で約 $\frac{1}{2}$ である（一九六

第1表 増富の人口減少

昭和	男	女	計
24	1,347	1,356	2,703
34	1,326	1,310	2,636
35	1,300	1,289	2,589
36	1,287	1,291	2,578
37	1,269	1,282	2,551
38	1,268	1,221	2,489
39	1,214	1,162	2,376
40	1,180	1,147	2,327
41	1,062	1,065	2,127
42	1,016	1,042	2,058
42/24	75.4%	76.8%	76.1%

(須玉町役場住民登録台帳)

四年現在)。

次に富と知力と隔絶性の総合指標として高校進学率を示せば、須玉の八〇・一%に対し増富は僅かに二七・三%で、その比 $\frac{1}{3}$ (一九六二一六年の平均値)とその間に大きな較差のあることがわかる。電話加入率、テレビ普及率においても同様な傾向が顕著であるが、生活水準の低減については縁辺集落黒森の部で更に詳論するので、ここでは平地農村と山地農村との比較にとどめた。

5 在住人口の漸減

一九六三年における増富の出生率は一〇・二%で死亡率が九・三%であるから、この地域でも僅かながら人口の自然増加が認められる。ところが在住人口は第1表に見られるように年々減少の一途を辿り二十四年の約四分の三となつてゐる。この社会減少という事実は現在の生活水準においてさえ、都市地域との生活水準の較差の大きなことを物語るものであつて、山村の人口過疎化現象の顕れである。更にまた

性別人口構成では平地農村の須玉地区が、日本の平均状態と同様、女子人口が男子人口よりも優越するのに対し、増富は殆んど均衡している。この事実は前述のように増富が林業卓越の地域であり、男子の労力を要求するためと解してよいであろう。

三、高距縁辺集落の諸相

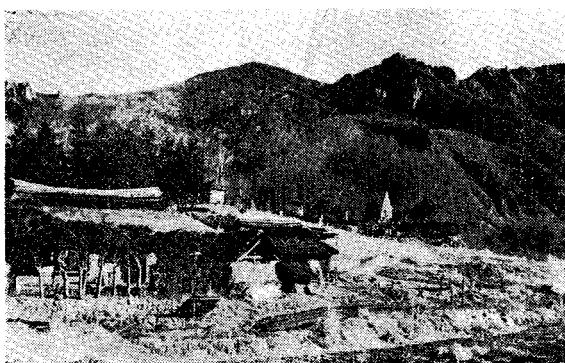


写真2 金山集落 旧民屋とヒュッテ、
背景は瑞牆山

・金山の高距位置（写真2）

金山は秩父多摩国立公園の西端、みずがき山の南麓金山平に位置する戸数二戸の山小屋集落である。金山は今までわが国の農村としてはその海拔高度において最上限の集落であると諸書に記載されている⁽²⁾。

その上限において標高一四一〇米に達する金山では正確な気象資料が得られないでの、ここに半世紀以上居住した有井氏の経験した生活気候ともいすべき気象の恒例の経過を記述する。

九月二十四日頃になると既に初霜を見る年がある。三～四回降霜のあつた後では連日霜柱が立つ。十月末になると本谷川の水は凍りはじめる。十一月中旬には初雪が降り、十二月には積雪量三〇釐に達する日もある（一九一二年十二月二八日最大積雪量五五釐）。雪は四月末まで降るが、年によれば五月上旬でも降雪を見る。晩霜が五月中旬まであるので無霜期間は短い。高距に伴う気温の遞減、こうした亜高山圏に位する金山がはたして本那最上限の高距農村であり得るであろうか。次の記述はそれに答えるものである。

・金山の発生と生活様の変化（第2表）

金山にヒュッテを經營する有井氏によれば、金山に関して次の伝承がある。「戦国時代金山平には金山千軒とよばれる村があつた。甲斐の武田氏は甲金を鋳るために数千人の人夫を送り込み、採鉱に従事させた。金山総監督小尾氏

第2表 金山の生活態様の変化

戸 数	1 10	7 2	1 2	
経 濟 態	牧馬・板材 - (松平 牧場)	炭焼	山小屋	
交 通	金山峠越徒歩	駄馬	本谷川筋徒歩 林道 トラック	
燈 火	たいまつ	燈油ランプ		
年 代	一八八四	一八九四	一九一二 一九〇七 一九〇四	一九三五 一九四三 一九五四 一九六五

は幕末まで小尾領主として在住した。現在有井氏庭前には当時碎石に使用したという石臼がある。

一八八四年(明治十七年)、神戸の馬喰有井金七氏はこの平に実草の多いのをみて、馬の肥育に適すると考えて入山し、持馬を肥育して販売した。馬の監理は子女に委せ、自分は専ら販売に従事し、閑期には山稼もした。こうして金山は開発されたのであるが、その後十戸が入植し、金山平の原野六町歩が開墾された。入植者は信州川上村から二戸、他は北巨摩郡下と母村の人々で、家を長男に譲つた壯老年層の者が多かった。

牧馬の最盛期は日清戦争頃で、川上、清里方面からの依託飼育も行はれ、四月から十月にかけては、みずがき山麓二五〇町歩の原野に三〇〇頭もの馬が放牧された。これ等の依託馬は十月末になると里に帰されて舍飼された。

飲料用水路が開かれ、牧柵が張りめぐらされたのはこの頃である。毎年八月一日には母村神戸に馬市が立ち、上州・静岡方面の馬喰が仔馬を求めて集つた。当時この地に入るには、黒森から金山峠を越えて入る六糠半の歩道しかなかつた。

低生産性の高冷地なので、自家用の農耕と牧馬の収入だけでは生活にこと欠く住民は、官有林を盜伐して生活費の不足を補つた。みずがき山の南斜面官有林の中に木曳小屋が掛けられて製板が行われた、板材は金山峠越に黒森、和田に背負い出し、土地の材木商の手を経て甲府方面に売り出された。

一九一二年戸数は七戸となつた。一九一一年累年水害の多かつた山梨県に対し、帝室林野管理局から御料林一九八二〇三・三七町歩が水害防備用として下賜された。これが恩賜林である。金山付近の官有林が恩賜林になると、林野管理局甲府出張所はこれまで默許していた盜伐を厳禁し、林野巡査を派遣してその監理にあたらせた。住民は盜伐による現金収入の補給なしには、この農牧生産性の貧弱な地に定住することができず、その上一九〇七年にみずがき山の西麓、金山峠の北側に北巨摩郡畜産組合松平牧場が開拓された。夏期六月から八月末まで三〇〇頭の放牧が行われるようになると、金山平の牧馬は止み、住民は離散して僅に二戸が留るのみとなつた。

大正初期二戸であつた戸数は、乏しい収入に耐えきれなくなつて一九四三年には唯の一戸となつてしまつた。残存者は恩賜林から製炭原木の払下げをうけて炭焼を行つた。製品は人背又は駄馬によつて黒森を経て神戸に出荷した。しかし原木不足で製炭だけでは生計が立たなかつた。

廢村になりかけたこの集落が、漸くその生存をとり留め得たのは、一九三五年頃からみずがき、金峯・甲武信岳へ登山者が入りはじめた為である。民屋は山小屋となつた。

今日金山は山小屋集落としてその機能の変貌の上に存続している。現在戸数二戸、バンガローを背にしたモダンなヒュッテが一戸、開拓創始者有井氏の旧養蚕農家型のかや葺屋根の民屋一戸が民宿となつてゐる。

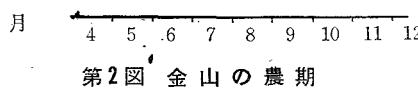
登山客の多いのは晚春五・六月と八月の盛夏、晚秋十月である。特に日曜祭日には宿所は満員となるが、冬期は淋

れる。年間約七〇〇の登山客をみる。

日常の生活物資のうち野菜はほぼ自給するが、他は総てラジウム温泉を経て華崎から入荷する。この集落は最も近いラジウム温泉でも五軒の林道を利用してせねばならないので現在なお無電灯集落である。一九〇七年までは松根の灯を使用していたが、現在はランプを使用している。石油消費量は自家用一戸平均五罐である。

・金山は高冷地農村ではない

金山平は秩父古生層の硬砂岩・粘板岩と黒雲母花崗岩が基盤となり、その上を約三〇釐の厚さの安山岩質の火山噴出物で覆われている。



第2図 金 山 の 農 期

天然肥料を得るための山焼は一九一五年頃（大正初期）まで行われ、初春五月雪溶け後に点火された。山焼は時に山火事の原因となることもあります、特に川上村方面からの山火事の被害が多く、県境に防火線が築かれた。

一四一〇米に達する高冷地金山の春は遅く、ために無霜期間は約一三〇日である。南東に傾く耕地面の日照は良好であるが、作物の成育期間の短いことが欠点で、畑地（第2図）は一毛作しかできない。単位面積当たりの収量も少く、備荒作物であるソバの反収は六斗、バレイショは最高四〇〇貫である。

桑の発芽は遅く、春蚕の掃立が六月末、収繭は八月七、八日となる。夏蚕は八月五日頃掃立て九月六日に収繭する。夏蚕の掃立一〇グラムにその

収穫量が推定される。

耕地の四周は広い林野なので兔害が著しく、その上原有林の植林は耕地の日蔭となり、その上気温の低下を導くこととなつて、民有地の生産を阻害する。

米の試作は一九〇七年頃までなされた。試作田は集落の道下の約二〇〇坪、その上限は一三九〇米であった。稻苗は母村神戸で育苗し、六月一〇～二〇日に田植、九月中旬に収穫したが、収量が乏しいので養蚕の最盛期に磨滅した。雜穀（大麦・小麦・アワ・大豆）の反収も乏しいので現在は中止し、耕地は草刈場となつたり、植林されたりしている。私有地三・八ヘクタールのうち耕地は僅かに〇・六ヘクタールに過ぎず、この耕地面積では到底二戸十人を養うことはできない。

現在戸数二戸のうち一戸（有井氏の新宅）は戦後一時増富銅山の鉱夫となつたが今は閉山したので、耕地を持つが耕さずヒュツテの經營者となつた。他の一戸有井氏本家は民宿を営みながら僅かに庭先の耕地を自家用野菜畑として耕作しているのみである。

こうしていまや金山は農業集落の名を冠することはできなくなつてゐる。

2 隔絶的高距山村黒森

黒森は塩川の支流釜瀬川の谷頭近く、標高一一〇〇メートル、壯年期の河谷底にある四七戸の疎村形態の小集落である。明治初年の大火により村に関する文献は消失してその起源は不明である。

葦崎からバスで時間距離一時間半、通仙峠の峡谷を経て塩川集落に達する。幹線道路塩川黒森線はバスが乗り入れていないのでここで下車し、比高三四〇メートルの急坂を神戸の尾根まで登る。この間徒步距離三〇余分。神戸トンネルを

くぐり釜瀬川の谷に下る。これから徒歩で約一時間半を費して黒森に達する。このルート以外には集落の北部、信州峠（一四六四米）を越えて千曲川上流の川上村に至る道があるが、この峠の交通量は極めて貧弱である。

いまこの集落の生活圈を示す一指標として、少し古いが手許にある通烟圈の資料を示せば第3表の如くである。

第3表 黒森、増富の婚姻圏
昭26~32

圈	黒森	増富
部落内	7	
村内	7+5	51+41
郡内	1	0
県内	0	90
県外	14	51
計	34	233

第3表 黒森、増富の婚姻圈		
圈	黒 森	増 富
部落内	7	51+41
村内	7+5	0
郡内	1	90
内外	0	51
県内	14	
県外		
計	34	233

村内の十は須玉町との婚姻数。
戸籍簿から出一富村一
件、四四・一%である。これは京浜方面への出稼者の縁組が大部分で、郡内婚は僅に一件にすぎない。町内婚が五五・九%であることは、住民の生活交渉範囲が旧隣村までで、その生活圏が狭小なことを示す。出稼者を除いた通婚が旧隣村外で唯一件だけであることは、隣村以外県内各地との交渉が殆んどないことを物語るもので、その隔絶性がうかがわれる。

次に高校進学率が旧村の二九・一%に対し黒森が僅か二〇・八%であることは、富の程度もさることながら、華崎須玉地区の高校までの時間距離の遠隔なことと、地形的隔絶性を物語るものである。

一方土地利用の面において現在なお〇・一四ヘクタールの切替畑を有することは、たとえその面積が狭小であるとは言つても、山地原始的農業の残象であり、黒森の文化水準を示す一経済形態である。

・衰えた牧馬と養蚕

戦前黒森では各農家で一~二頭の成馬を販売し仔馬をとつていた。八月神戸で馬市が開かれた。仔馬の販売は各戸の現金収入の面で相当な比重を占めていたが、戦後は需要の激減から育馬数は減少の一途を辿っている。昭和二七年

四四頭、三五年二二頭、三九年七頭と。

これに代つて乳牛肉牛の飼育がはじめられたが、ミルクは市場への距離が遠隔のため乳牛は唯の一頭で、他の八頭は肉牛である。

まぐさ場と呼ばれる採草地は共有地であるが、部落の財産区の収入増加のために植林が行われるなどして、家畜の飼料源が減少し、これがまた畜産を衰えさせる原因ともなつていて。

生糸がわが国輸出品の大宗であった頃、この集落の殆んどの農家は養蚕に従事していた。

桑の発芽が遅いので、夏蚕の掃立は六月末となり、夏蚕と秋蚕飼育しか行われなかつた。戦後輸出が激減したので現在は（一九六〇）養蚕戸数一二戸、収織金額は二〇万円となり、繭による収入が五万円以上あるものは唯の二戸にすぎない。

・自給できない主穀生産

一九六〇年の農業センサスによれば、稲作農家二九戸、水田面積は九・一ヘクタールで米の収量は一〇・七四二トントンであつた。飯米農家が一四戸、全く稻作をしない農家が一一戸ある。

雑穀野菜の収穫は僅少で、農産物販売価格五万円を越える農家は七戸、うち二戸は養蚕によるものである。

稻は四月二十五日頃保温折衷苗代に播種し、六月十日頃田植、十月中旬初霜をみて刈取る。栽培種は藤坂五号、平井種（在来種）彦太郎（もち）等の早生種で反収五・七俵、晚生種の陸羽一三二号では反収が三・五俵と半減する。これは耕地の平均標高が一二〇〇米で亜高山圏に入り、水田の上限は一三〇〇米、上限の水田は戦後の開拓による」となどの理由による。

八・六ヘクタールの畠地は三七戸の農家に属し、雜穀、蔬菜のほか山芋までが栽培されるがその殆んどが自給用であり、換金作物としては僅に〇・八八ヘクタールの桑園があるだけである。

総戸数四七戸のうち専農二五・五%、兼農五三・一%、非農家は一一・三%で、蔬菜の外は食糧の自給ができない集落である。

・現金収入の手段—炭焼と出稼—

黒森の農家は冬期の副業として八幡山の水晶採掘に従事した。入山は二～三月間で借地料反二五錢、個人の借地面積は一坪に限られたというが、産出量は不明である。一九一二年産出量が減少したので採掘を中止した。

それに代る副業に炭焼がある。最盛期は一九三五年前後で、戦時中木炭車が使用された頃、黒森の製炭量は年二万俵に及んだ。原木はみずがき山麓の県有林の払下げや、川上村に依存した。冬の農閑期には殆んどの農家がこれに従事し、泊り山して製炭する者もあつた。

終年專業者は年五百俵も焼いた。販路は信州と甲府方面で、上質炭は信州峠を馬背で川上村の原、御所平まで運んで捌いた。一方雑炭は釜瀬川を下つて大渡、八巻まで搬出し比志局の地点で地方商人に売り渡した。

最近は燃料革命のために木炭の需要が激減した。一九六〇年製炭專業者は四戸で兼業者は二四戸。原木の高騰のため実収入が減少して生活に苦しんでいる。

黒森の私有林は二三・五ヘクタールであるが、人工造林して薪材、用材とした方が製炭原木としてよりも有利である。県有林の原木払下げ地は伐採後カラマツの造林が行われているから原木林は減少するばかりである。原木払下げ値段は炭価から割り出されるが、原木の減少から次第に高騰し現在（一九六四）炭一俵分一五〇円に当る。俵と繩代

が約五〇円。ナラ上質炭が原地で俵五五〇円であるから製炭者の実収入は俵三五〇円である。一日の平均製炭能力は二俵、月平均実働日数が一〇日であるから、手取りは月一万四千円にしかならない。そのため青年層は出稼して村に残る製炭者は五〇才以上の老年層のみである。一九六三年県有林の原木払下人は黒森に三三人あつたが、六四年には一六人と半減した。

黒森の青年層は終年出稼し、女子は韮崎、京浜、静岡に行く者が多い。残された老年層、婦人の冬稼に道路工事がある。いま黒森金山ラジウム温泉観光道路が農事業として開発されている。賃金は男子日当五〇〇円、女子三五〇円であるが、封鎖された黒森では冬期の重要な現金収入源となつていて。

・生活水準

黒森の高校進学率が村平均の三分の一以下であることは前述の通りであるが、更にその他の指標でその文化度を吟味すれば次の如くである。まず娯楽と文化伝達機関としてのラジオとテレビの普及率をみれば前者は村平均の八〇%弱、後者は八〇%強であり、更に電力メーター計器の普及率は村の六割弱、電話普及率は一割強と、何れも村平均より劣っている。また富の程度を示す担税能力をみれば固定資産税で村平均の約六割、県村民税では五割弱と共に村の水準以下である。

以上の数値は、この集落にいまだに動力農器具の導入がなされないことを、耕地の地形に制約されると考えるよりは、経済的貧困、生活水準の低位に基因すると見るべきであろう。

・疲弊した農山村型の年令構造

一九六四年九月現在黒森の人口は二三〇人である。過去六〇年間戸数は四〇前後で殆んど変化がない。人口動態も

停滞型で最近は若干減少の傾向にある。人口の性別構成は男子一二七人に対し女子は一〇三人で、この傾向も殆んど不変である。この構成は林業本位の山村の特性であるが、黒森の最も顯著な人口学的特性はその年令構成であろう。黒森には青年が五人しかいない。それは農家の後継者で独身者である。女子青年団員は零。女子は中学生以下の児童幼児と既婚者だけである。青年層の欠除した集落、これが黒森の特性であり、疲弊した農山村型年令構造の典型である。

3 高冷開拓地戸屋・方伝の現況

・位置

戸屋方伝は釜瀬川の右岸、鎗峯、鍋山の南斜面、標高一二二〇〇米の浅い二条の谷底に散在する開拓村で、釜瀬川の谷底からは山脚や雜木林に遮ざられて見えない。鎗峯山から南に派出する山脚を隔てて北側が戸屋、南側が方伝である。

・入植

一九四七年既存集落神戸の私有地と県有林で村の借用地が開放されて入植した。私有地には方伝が、借用地には戸屋が立地した。入植者は京浜からの疎開者や徴用工・商業からの転業者・海外引揚者で、かれ等は増富出身者かその縁故者であったが、それに御門の増反農家の次三男も加わった。

開拓組合員は一七戸で殆んど御門、神戸出身者であるが、ラジウム温泉部落からも三戸が加入している。

・開拓地の四季—農耕カレンダー

開拓地の割当ては一戸平均方伝一・八ヘクタール、戸屋一・五ヘクタールであるが、安山岩質の熔岩、泥流地で岩間が多く土壌が浅いので開墾は困難を極めた。初めは共同開墾であったが途中から個人開墾となつた。

横尾・鎗峯から吹き下す寒い北風の日が少くなる四月初旬になると、小麦畑の除草がはじまる。同時にじやがいものが播かれ、下旬には大豆が播付される。五月上旬八十八夜には夏そばと小豆が、中旬には秋小豆が播かれ、小麦とじやがいもの収穫は梅雨期に入る。八月上旬漬大根が播かれ、一・三日には一番そばが刈り取られ二番そばが播かる。下旬には夏小豆の収穫が始まる。十月末は多忙で二番そば、秋小豆、大根の収穫と同時に冬小麦の播付が始る。十一月に入つて自家用白菜が収穫される。収穫物の整理が済んで十二月からは農閑期となる。

・貧弱な土地生産性と現金収入

米作農家は方伝に三戸あるだけで自給はできない。畠地の耕作面積は既存農家よりは広いが農作物の反収は少ない。土地生産性の貧弱なことは米の反収をみただけでも明瞭である。反収一・五俵は平地村の五分の一以下であり、他の雑穀例えれば小麦をとつても反収二俵で平地村の半分以下である。ただ小麦は開拓地の自己消費用穀物として最も重要であるから他の作物よりも広く栽培される。

開拓当初は換金作物として白菜、カリフラワーの栽培が行われたが、急坂を人の背で三十分、御門・神戸に下つて更にトラックで葦崎・甲府に出荷するには多大の輸送費を要した。トラックの故障や出荷日選定の誤りから競の好期を逸したり、品質の低下で安価に格付されて収益を得るに至らなかつた。結局運輸の不便なことがこの栽培を阻止した。

現在の換金作物は大麦・小麦・いも・大豆であるが、自己消費外の販売額は少く、農産物の販売価格が二〇万円以上は唯一戸でこれは戸屋の乳牛飼育家であり、他の八戸は一〇万円以下である。

乳牛飼育は田地が狭小で飼料の藁が得られず、濃厚飼料の購入にも資金にこと欠く有様で現在飼育するものは前述

の唯一戸である。

乳牛の導入に次いで綿羊飼育も試みたが、剪毛に時間を要することと労働力の不足からこれも失敗した。現在みられる小家畜は山羊だけで、自家用乳をしぶり仔山羊を育て売るもの一〇戸を数える。

安直な現金収入法は出稼で、青壯年層には終年土方、山作業員、石屋・大工となつて近隣に出る者が多い。
・開拓適地選定基準から見て

標高 平均高度二二〇〇米、中央日本の米作上限界に近い。米の反収一・五俵がこれを物語つていて亜高山圏寒冷地である。

気候 増富中学（一〇三九米）の観測値から推定すれば、五～九月の平均気温は一六度である。これは普通畑作に必要な平均気温一三度、主畜農業に必要な限界気温一〇度より相当に高い。また年雨量は千数百耗であるから、気候条件からは適地といえよう。

土地の性質 傾斜は一二～二五度で耕地としてはC～D級である。土壤は安山岩質の砂礫土に火山灰と植壤土を含む。岩塊が所々に露出し石間が多く、土壤の厚さは四〇厘米未満で開拓適地とは思えない。

用水 表流水は細く、養畜にさえ不十分である。湧水と井戸水が飲料水となつてゐる。

道路 幹線道路塩川黒森線と開拓地を結ぶために既存の歩道山道が利用された。車道は戸屋だけが強引に民有地を潰して開いたが、方伝は神戸農民の反対にあつて現在も開かれていない。これは方伝開発の大きな支障条件となつてゐる。馬鈴薯原種栽培が止つたのもそのためである。老年者の担夫輸送ではその重労働に耐え得られなかつたからである。

社会的環境 戸屋は県有地が払下げられて各戸開拓地の分割登記が終っている。しかし方伝では登記未了である。土地の生産性が低く冬期の出稼による現金収入で生活を支えていたので、共同開墾に脱落したり組合費を未納したりして会計係の専横に対しても出稼者は萎縮して発言権もなくなつた。このために組合借入金は増大したが返還の能力がなく、これが登記を遅らせている。

一九五二年十二月、無灯開拓小屋に配電された。配電費の個人負担八〇〇〇円一万円は当時の開拓者には相当の負担であった。

開拓地は郵便配達区域外地域である。開拓民は郵便物を神戸の指定者宅まで受取りに行かねばならない。

教育にも不便である。児童は急坂を三〇分、釜瀬川の谷底に下り更に本校まで四秆の道を通はねばならない。域外との交渉にはバス停留所のある塩川まで神戸の尾根トンネルを経て一時間余の急坂を登り下りしなければならない。

・開拓地の将来

農業の機械化は全くみられず總てが手労働で、収入は一ヘクタール当たり五万円という現状である。勞して功少しとみた青年層は全員離村して、葦崎、諏訪方面に終年出稼し店員、工員となつてゐる。定着農耕を嘗む青年は一人もない。五〇才以上の老年層しか残らないこの開拓地では酪農の導入が考えられている。しかし導入資金とその将来の返還の見通しもつかない。採草地まで整地して小麦畑にしなければならない程開拓適地は欠乏している。

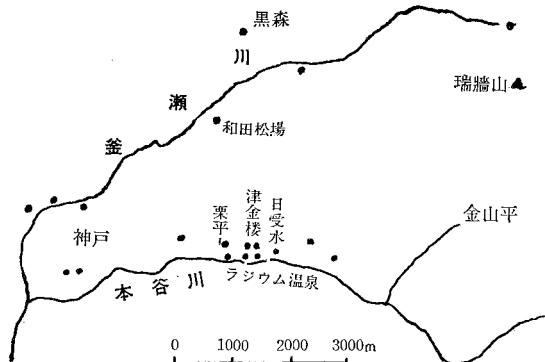
いま生活水準の一指標としての（第六表）担税能力をみると固定資産税で村平均の四分の一、町民税で二分の一でいかにその能力が低いかが明かである。

一九六八年現在、開拓は終了したが戸屋九戸のうち六戸、方伝八戸の内二戸は離農して山を下っている。まさに壊

・温泉の開発

鉱泉が唯一のものである。

一般に増富温泉と呼ばれるものは、本谷川の津金楼を中心とした一群の温泉群を指すものであつて、村全体に分布するものを指すのではない。温泉の効能は胃腸病、神経痛、ロイマティス、肝臓病、関節炎、腎臓病、呼吸器疾患、生殖器諸病、湿疹、ぜんそく、水虫、皮膚病と多方面であると称されている。



第3図 増富村鉱泉分布図

滅に瀕した開拓地である。

4 ラジウム温泉集落の存在は村民の生活に如何に貢献しているか

・化学的見地からの温泉④

増富の名は山村としてよりもラジウム温泉として知られている。山梨県の温泉のうちその大半は増富に集中している。増富には四六個の鉱泉が湧出するが、その分布は第3図のごとくである。この温泉については多くの化学者により放射能が測定され、ラドン・ラジウム・トロン・トリウム等の含有が多いとされている。ラジウムを多く含有するのは和田松場鉱泉・東小尾泉・栗平天然風呂・津金楼温泉・柄久保湯・金泉湯・日受水等である。

花崗岩地域でトリウム系元素含有量の多い温泉の分布は、本谷川では不老閣新湯から津金楼を経て日受水に至る地帶で、金瀬川流域では和田松場

伝承によれば「戦国の頃、甲斐の武田信玄はその軍事的活動の経済的源泉である金山開発のために、前述金山を開いたのであるが、その際本谷川の谷底に自噴する鉱泉を発見した。外傷や神經系統疾患によく効くので、兵戦の度毎に武田将兵の湯治場とした。」という。

以後万病に特効ある温泉として次第に人気を集めたが、明治中期には温泉旅館が経営され、東日本の一休養地となつた。現在旅館は五戸、自噴泉は二で他はボーリングによるものである。

・ラジウム温泉集落の社会地理学的考察

地方民は農閑期や田植休にリクリエーション・社交場として利用しているが、そのことは温泉集落の存在が村民に大きな貢献をしているということにはならない。浴客の最盛期は夏期八月で、京浜静岡方面からの登山客・ハイキング客で賑い、華嶺発ラジウム温泉行のバスは終日満員である。冬期は閑散で十二月末温泉発華嶺行の始発は筆者一人だけであった。

この温泉集落が村民に貢献しているのは村財政に対してである。温泉集落の経済力と担税能力は一般住民の比ではない。いま旧村民一人当りの町民税をみれば、須玉町の平均額五八七円に対して増富は一八〇円である。ところが温泉集落は九、九六七円で増富平均の実に五五倍という多額負担である。更に固定資産税についてみれば須玉町の平均額一、二三五円に対して増富は六六二円で約五〇%、これに対して温泉集落は一五、〇五四円で母村増富の実に二五倍の担税能力である。この多額納税は旧村時代から町財政に貢献するところが大きく、村の施設拡充に役立つところが多かった。また総納稅額からみても増富の町民税四二八、七七〇円中温泉集落分は一〇九、六四〇円でその比重は四分の一、固定資産税総額は一、五七二、一八〇円中一〇五、三八〇円で、比重は一五分の一である。かくて増富の

納税者二、三八三人に対してわずか十一人の温泉集落の担税者が町民税の四分の一を、また固定資産税では一、三七五人に対して七人が一五分の一を負担しているのである。こうしてこの温泉の存在は村政上欠くべからざる重要な財源となつてゐるのである（一九六四）。

四、高距酪農開拓地柳平（五万分一地形図塩山参照）

・柳平の位置②

柳平は関東山地の南西部、山梨県東山梨郡牧丘町に属する戦後の開拓村である。海拔高度はその居住縁辺において一五〇〇米、牧野の上限は一六〇〇米に達する。本邦の既存農村に比しあまりにもその標高が高く他に例を見ないまさに高山圈高冷地ともいふべき位置にある。

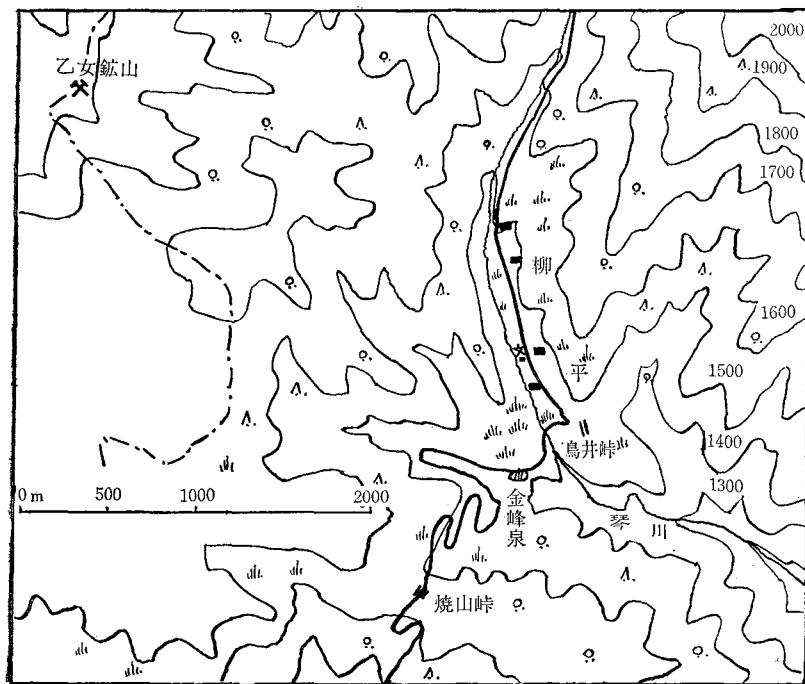
終戦後の山梨県開拓課の査定では開拓不適地とされたが、入植者は戦後一十余年間試行錯誤を繰返しながらここに定着を試みている。

・営農地の自然条件

柳平は笛吹川上流の一支流琴川の谷が、鳥井峠の北部で国師ヶ岳の裾合に、僅に開けた冲積錐状の緩斜地をもつところにある。

地籍は県有林で、植生は落葉広葉樹のシラカバ・ナラ等があり、林床植物としてイタドリやアザミの繁茂していたところであった。

山梨県林務課はここに県直営の苗圃を作り、それを付近の県有林に供給しようと計画していた。



第4図 牧丘町柳平開拓地

土壤は谷壁の傾斜地は火山灰土であるが、谷底では砂質植土で共に酸性が強く、炭カルを施肥して中和し、磷酸肥料で土壤改良をしなければならない。土壤の厚さは100~300mmで一般に浅い。

次に気候資料がないので開拓者の生活経験を記すと、初霜は九月十一日が最も早く初雪は十一月末である。積雪は二月中旬には一米に近く、晩霜は五月末、四十年には六月二日に経験した。冬期の最低気温は零下20度位まで下り、室内でも早朝零下十三度を示すことがあり、卓越風金峰風の北西風は乾寒風で身にしみる。春の彼岸桜とりんごの開花期は五月三十一日であり、夏は霧の日が多い。年雨量は1200ミリ以上と推測される。

- ・開拓の経過—私設パイロットファーム—
- 昭和二十一年八月、満州開拓引揚者四人が

帰農組合を組織して自作農特別措置法の適用を受け、金峯開拓農業実行組合となつた。初期の計画は組合戸数を一〇戸とし、耕地二〇町歩、採草地一〇町歩を開拓し、農林畜三位一体の営農形態を採用しようというのであつた。初年度は県林務所から障害木の払下げを受け製炭によつて現金収入を得た。開墾地の試作物は北海道種のトウモロコシで、これは見事に結実した。ソバは焼灰を施肥したところは結実したが無肥料では開花しただけであつた。農林一号のいもは五月二〇日播種して八月収穫、反収七〇〇～一〇〇〇貫を得た。ライ麦は兔害を受けたが、施肥して反三俵、無肥料で二俵を収穫した。越冬用野菜としての大根、白菜も成功した。

こうした試行錯誤は連年続けられた。花豆・大豆・インゲンは堆肥を施肥したところは結実したし、夏小豆は無肥料でも結実した。北海道種の稻は出穗はしたが結実せず、その上虫害と野鼠の被害を受けて失敗し、米作の可能上限界を越えている事を体験した。

ナス・トマトは生食できるし、南瓜は高冷地農家の主食として採用できることも知つたが、これ等の種子は総て耐寒性の北海道品種であった。果樹栽培も試みた。国光・旭・紅玉のりんごは小粒で商品価値がなかつたし、高冷地の故か害虫駆除に消毒の効果の少ない事も知り得た。換金作物としてのカリフラワーは六月初旬播種して九月中旬出荷出来たが、輸送と市場への到達度の関係で発展しなかつた。椎茸の栽培も可能であるが労働力に余剰がない。

こうして蔬菜と雑穀を中心の畑作農業の確立を計つたが収穫は常に不安定で、現金収入は製炭に依存しなければならなかつた。昭和三十八年木炭生産は組合で六〇万円に達した。

昭和三十九年来農業に見切りをつけて酪農に転換した。それより先昭和三十年頃から二、三の小家畜を導入していたが、これを次第に牛に切り代えていた。入植当時県有林を開墾地として解放されたもの一三・七ヘクタール、昭

和二十七年採草地として借地したもの二一・一ヘクタール、そのうち個人所有一ヘクタールを残して全野の牧野改良に着手したのは三十九年である。同年国連の一機関である Service Civic International から延一四〇〇人の労力援助を得て、牧野改良基盤整備は着々と進んでいる。現在牧草地は一五ヘクタール、牧草はオーチャード・チモシー・イタリアングラス・ホワイトクローバー・ケンタッキー三一、ケンランドクロバーを播種七年更新の予定である。

牧草は肥培管理され、反収一〇〇〇～三〇〇〇貫、改良牧草地は谷底平地一〇ヘクタール、谷壁傾斜地三ヘクタールである。

現在サイロ・畜舎・トラック等総て共同出資で協業である。冷却室、畜舎の改良も行われ、草刈機、搾乳機等機械も導入された。乳牛飼育頭数二四、経営収支も漸く黒字となつて來た。

・定住集落への基盤整備

酪農開拓村柳平が全借用地を牧野改良して肥培管理し、牧草の生産量を増大することによつて乳牛の飼育頭数を増し、販売乳量を増大すれば定住集落への基礎は確立するであろうか。定住には生活の為の生産の外に消費面の基盤の確立が必要である。

組合員四戸の収入は一にかかるて牧牛にある。牧野改良・肥育・搾乳すべて協業である。しかし耕地一ヘクタールは各個人所有で、その半分は野菜畑として自給用に供し、他の半分は牧草を栽培してそれを組合に売却する仕組になつてゐる。乳牛の管理、牧野作業は交代勤務であるが、日当は一日七五〇円と計算され、組合の粗収入から支払われる。四十二年度の酪農經營の收支では一七一・四万円の黒字を得て、将来酪農で生活できる見透しが建つたが、生産面以外の問題解決が定住か移動かを決定する要因となる。

まず到達度についてみれば、町の中心塙平までは焼山峠（一五六六米）を越えて二〇糠。最も近い隣集落杣口でも八糠の道程である。杣口・柳平間には約四十年前木材搬出のため琴川沿いに敷設された軌道があり、上りは馬力、下りはトロッコを自走させている。しかし、雨天には使用不能となる。輸送費は貨物四キログラム当たり一〇円である。三十六年塙平から焼山峠越の林道が開通したので、地方都市塙山へはトラック輸送が可能となつた。住民は上流の硅石・モリブデン鉱採掘の乙女鉱山の鉱石輸送トラックに便乗する。塙山までの礼金一人一〇〇円。琴川沿いの歩道は登山者だけが利用している。組合は一台のトラックを共有するが負担金一戸年一〇万円。個人使用の場合はガソリン代を自己負担しなければならない。このように外界との交渉には時間と経費の支出が大きい。

飲料水は湧水と簡易水道に依存していて十分である。灯火は開拓初期は松根のたいまつであったが、二十三年乙女鉱山所有の送電線を買収して関東配電から電力の供給をうけた。

住民は子弟の教育には熱心である。開拓初期の学童は一一糠の道を本校まで往復せねばならなかつたが、幸い入植者の夫人に教員有資格者がおり、二十三年児童四名の分教場が設立された。このことは入植者を定着させる大きな要因となつてゐる。現在高校在学生三名の存在はこの基盤の上に可能であつた。

協業によつて生産力を増強し、酪農經營が可能で安定化してきた現在、住民は更に観光方面への進出を望んでゐる。秩父多摩国立公園に隣接し、国師ヶ岳・朝日岳・金峯山・みづがき山・ラジウム温泉・昇仙峡を連ねる環状観光線の開発計画が実現すれば、この集落の定住化に貢献するところは大きいと思われる。

柳平が本邦で最高標高の定住農村となり得る日は、開拓資金四百余万円の返済が完了する日であり、その意味で貴重な私設パイロットファームである。

五、結　　び

以上の高距縁辺集落は、それ等の発生と変遷経過、土地生産性、生活水準を通して考察すれば、その標高が一二〇〇米を越えると、既存の生産形態である自給的穀桑農業や牧馬・製炭に基礎を置くときは、低暖地に比して生活水準較差が大きく、生活難苦地域となる。これは山岳地域開拓基地としての定住上限に達したことを意味する。しかし休養・観光地としての山小屋集落や温泉集落は特殊基盤環境によつて、また新しい試みの高距酪農村は、より高距位置に立地することが可能であると思われる。

参考文献

- ① 増富財産区　沿革誌　一九六三　七七頁
- ② 東京天文台　理科年表　地学部　一九六六　地六一頁
- ③ 下方鉱藏　日本化学雑誌　七七ノ一一　一九五六（山梨県の温泉について　七八一二頁）